

水落遺跡の調査

—第108-4次

1 はじめに

調査の経緯 調査地は、水落遺跡の礎石建物SB200の南東120m、飛鳥寺西面大垣の西約40mにある。この、飛鳥寺の西側で北面大垣の西延長線以南の地域は、古代に蝦夷・都貨羅など辺境の民への饗宴がおこなわれた「飛鳥寺西」と呼ばれた地域にあたり、漏刻台と考えられる水落遺跡はその北端に位置する。また、寺域北限以北に展開する石神遺跡の建物群は、儀式と宿泊の場としての迎賓館にあたる施設とされ、両者は一連の機能を果たした地域と考えられている。

水落遺跡の周辺部では、これまでに、東南部の計画調査のほか、個人住宅建設や下水道工事などに伴って調査がおこなわれ、① 漏刻台以前に大規模な建物と長廊状建物があること、② 漏刻台の時期には、地下に木樋暗渠、地上には石組溝と石敷が広がること、③ 水落遺跡を取り囲むような区画施設は、漏刻台から50m以内にはないことなどが判明している。各所での所見を総合すると、「飛鳥寺西」の地域は、石敷、石列、石組溝で構成される「広場」であったとの想定が定着しつつある。

今回の調査も個人住宅の建て替えに伴う調査であり、土地所有者の理解を得て、現存井戸や新築予定地を避けた場所に、東西7m、南北4mの調査区を設定して実施した(東区)。また、北隣の第103次調査(『年報2000-Ⅱ』)で検出した石組南北溝SD3800(漏刻台以前の長廊状南北棟建物SB3810の東雨落溝)の延長線が、敷地の西端にかかることから、その存否の確認を目的として、東西2m、南北1mの調査区(西区)を設けた。

層序 調査地の基本層序は、上から旧家屋に伴う盛土、灰褐色土、茶色土、暗茶色土、黄灰色微砂、灰褐色砂礫であり、7世紀の遺構にとっては黄灰色微砂以下が地山となる。小礫・炭化物混じりで飛鳥寺の瓦や平安時代前半までの土器が多く含まれる暗茶色土は、厚さ0.1～0.2mで西北部が厚いが、その下面は南北4m間で0.2m北が低く、東西7m間で西が0.2m低い。同様の土層は、今次調査地の北・西方でも同様の傾斜をもって確認されており、この時期、飛鳥寺の西方は緩傾斜の広い平坦面を形成していたと思われる。

中世以降の小溝は暗茶色土の上面で、土坑SK3920や石敷SX3930など遺構の多くはその下面で検出した。

なお、調査区南辺の長方形土坑SK3947は、近世以降の家屋に伴う土坑で、各壁面は横板を約0.5m間隔に打った直径0.1mの杭で留めている。この土坑の方位(北で東へ約15°振れる)は中世以降の小溝および調査地東の里道の方位と一致し、「飛鳥寺西」におけるこの方位の形成は中世以降のことである。

2 検出遺構と出土遺物

検出遺構 東区の暗茶色土下面で検出した遺構は、その重複関係などから、3期に大別される。

1期の遺構には、地山上に積土をして作られた石敷SX3930と南北溝SD3940があり、2期には東への落ちSD3932、西への落ちSD3935、両者をつなぐ東西溝SD3945などがある。3期は、石敷を壊す浅い不整形土坑群と、それより時期の下る不整形円形土坑、方形土坑に細分される。しかし、検出遺構は十分に解明されたわけではなく、ここでは、調査所見を記して後考に備えたい。

1期の石敷SX3930は、東区中央に乱雑かつ散在的に遺存する。地山である黄灰色微砂の上に20～30cmの厚さで黄褐色粘土を、その上に厚さ10cmで金雲母・黄色土混じりの暗褐色土を積み、10～20cm大の川原石を乱雑に敷く。石はいたるところで抜き取られて、かろうじて東西幅1.3m分をそれと認識できるにすぎないが、2枚にわたる整地土層の及ぶ範囲を石敷の範囲とするならば、東西幅は2m以上と推定される。

石敷SX3930の西にある南北溝SD3940は、幅0.8m、深さ0.4mで、横断面が箱形を呈する。埋土の暗褐色粘土には流水の痕跡が全くなく、確認できる掘削面が石敷SX3930の下面と一致していることから、石列あるいは石組溝の基礎地業である可能性が高い。

2期の遺構は、明確な時期と位置づけが難しい。

東区西端の西への落ちSD3935は、その東端が南北溝SD3940と重なるように、南北方向に延びる。幅2m以上、深さ0.5m。灰褐色砂と径20～30cmの川原石で埋まり、集石にとくに構造物はない。河川の氾濫によって形成されたとみられるが、西区では検出されていない。

東への落ちSD3932は幅1mで、0.2m下がる緩斜面をなす。茶灰色砂を埋土とし、SD3935のような集石はみ

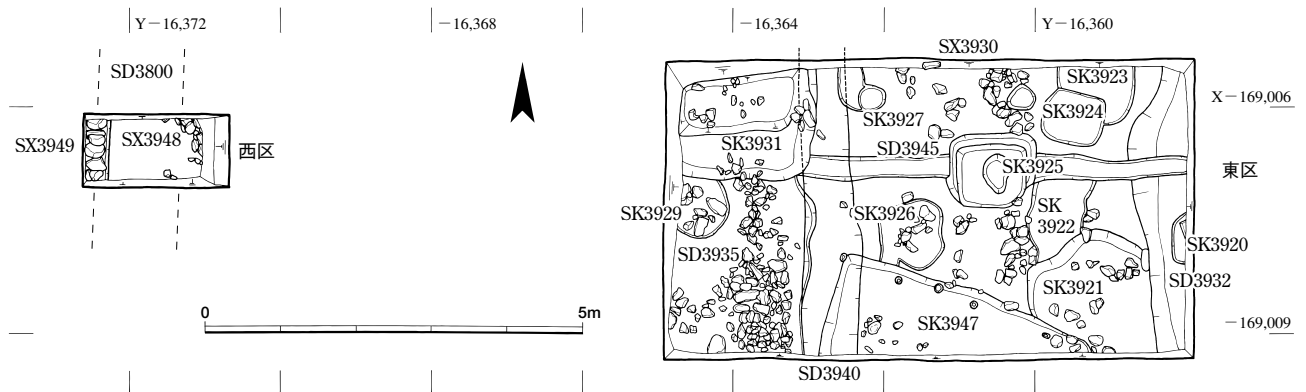


図80 第108-4次調査遺構図 1:100

られない。

溝SD3945は幅0.4m、深さ0.2mの素掘溝。SX3935とSX3932とを結ぶように東西方向に掘られている。

3期の遺構のうち、石敷SX3930を壊す土坑には、浅い不整形土坑SK3922・3923・3924・3926・3927がある。いずれもSX3930の敷石下面までの深さしかない。埋土には、石敷SX3930下の整地土である金雲母や黄色粘土粒が含まれており、土坑は石敷の抜き取りにあたる。ただ、出土土器などからはその時期を特定できない。

石敷を壊す土坑より時期の下る土坑には、不整形円のSK3921・3929・3931と方形のSK3920・3925がある。

不整形円土坑SK3921は直径約2m、深さ0.1mと浅く、土坑底には石塊が散乱する。西辺の土坑SK3929・3931は、西への落ちSD3935の上面で検出されたが、埋土はSD3935と同じで、底には大きな礫が散在する。

方形土坑SK3920は調査区東壁沿いにあり、一辺0.8m、深さ0.6m。炭混じりの暗灰褐色土で埋まり、比較的多量の瓦片と奈良時代後半～末(平城宮土器Ⅳ～Ⅴ)の土師器・須恵器、および少量の凝灰岩片、鉄片などが出土した。土器には、土師器杯A・杯B・蓋・碗A・碗C・皿A・杯E・甕A・甕B、須恵器杯A・杯B・同蓋・皿A・水瓶があり、このうち土師器碗A・碗C・皿Aには明瞭な灯明の痕跡がある。土坑は、飛鳥寺からの廃棄物を処理するために掘られたものとみられる。

石敷SX3930上の方形土坑SK3925は、一辺約1.3m、深さ0.5m。埋土のうえからも、柱穴である可能性を残すが、他に組み合わせるものがない。

西区では、石列SX3949とその東に敷かれた石敷SX3948とを検出した。

石列SX3949は、幅0.2mの掘形内に花崗岩玉石を1～2段積む。上面が揃わないことから、削平された石組溝の側石とみられる。その場合、石敷SX3948は幅1.3m以上の石組溝底石の可能性をもつ。しかし、第103次調査

の石組溝SD3800の溝内法幅は1.1mであり、この点からSX3949はSD3800の西側石とは考えられない。

そこで、SD3800の底石の傾斜を南方に及ぼすと、南21mにある西区周辺では、石敷SX3948の下約10cm、石列掘形底の高さになる。石列の配石状況からは、そのいずれに面をもつかは即断できないから、① SX3939がSD3800の東側石である可能性がある。一方、② 両者が時期と面を異にするものであったり、③ SD3800が西区まで延びていない場合も想定でき、現状ではそのいずれとも決め難い。

出土遺物 土器・土製品、瓦磚類、金属製品がある。

土器には、縄文土器、弥生土器、古墳時代以降の土師器・須恵器などがある。ほかに、円面硯、新羅産壺底部、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗各1点と製塩土器多数がある。量的には、暗茶色土出土の奈良末～平安時代までの土器が多く、遺構出土土器では、土坑SK3920の奈良時代後半～末(平城宮土器Ⅳ～Ⅴ)の土器にまとまりがある。

瓦磚類には、飛鳥寺の軒丸瓦16点、軒平瓦1点、丸瓦519点(44.7kg)、平瓦2462点(142.1kg)、隅木蓋瓦1点、磚2点、隅欠平瓦1点のほか、土管片1点がある。軒丸瓦の細目は、飛鳥寺のⅠ型式4点、Ⅰ型式a2点、Ⅲ型式・Ⅳ型式・Ⅴ型式各1点、Ⅳ型式4点、Ⅷ型式5点、豊浦寺Ⅲ型式A1点があり、軒平瓦1点は四重弧紋である。遺構ではSK3920からの出土が多いものの、周辺の調査地での成果からみても、付近に瓦葺建物の存在を示すものではなく、飛鳥寺からの流出と考えられる。

金属製品には、スラグ、鉄釘、鉄環などがある。

まとめ 調査では、7世紀代の遺構として、石敷と石列などの基礎とみられる溝を確認した。しかし、それらが、この地域の度重なる改変のいずれに属するかは明らかでない。西区についても、第103次調査の石組溝との関係が不明なままに、石列・石敷の例を加えたにとどまる。今後の調査成果を待ちたい。

(西口壽生)